

### 3. 回顧と将来の展望

#### 3.1 思い出

初期の頃から、会員として本会に参加せられ、爾来終始本会のため協力援助を賜わった長老先輩の方々に、協会の「思い出」についてご執筆をお願いしたところ、それらの方々からそれぞれ御寄稿をいただいたのでここに掲載する。ただし、俵国一博士のご寄稿は今回のものではなく、“鉄と鋼”40周年記念号のために執筆いただいたものであるが、創立当時の事情およびその後の経過などについて詳細に記述されており、まことに得難き貴重な資料と思われるので、特に本篇の初頭に再録させていただくことにした。

この「思い出」の内容は、先輩の方々にご感想やご意見のみならず、わが国の鉄鋼業に関する所感など、気楽な気持ちで執筆願ったものであることを一言お断りしておきます。

#### 日本鉄鋼協会創立当時の回顧

83 老叟 俵 国 一

本協会が創立されたのは大正4年3月であり、満40周年に当るので、その創立当時より関係した1人の生存者としてその模様を書くようにとの依頼があつた。そこで「鉄と鋼」の創刊号から協会の記事を抜萃する。

大正3年6月8日今泉嘉一郎、俵国一、野呂景義、香村小録の4名会合し、わが国において鉄および鋼に関する事業の発達を助成する目的を以て1つの協会を組織せんと欲し協議の結果

- (イ) 機関雑誌を発行すること。
- (ロ) 協会の発展に伴い理化学的試験所および参考品陳列所を設置すること。
- (ハ) 学術上および経済上時宜に適する研究調査をなすこと。
- (ニ) 会員の資格を鉄鋼採掘業者、鉄鋼製造業者およびその加工者、鉄鋼使用者、鉄鋼販売者ならびにこれらに関する技術者および従業者その他鉄鋼に関係ある特志者とする。

と一応決定したのである。

大正3年10月4日発起人会を開き、今泉嘉一郎、田中不二、俵国一、堤正義、野呂景義、香村小録および寺野精一の7氏出席し、会名を日本鉄鋼協会とすることとし、創立主意書および定款草案を作製した上に広く会員募集を開始した。

大正4年2月6日日本鉄鋼協会楼上にて創立総会を開き

応募会員の数は610名に達した。最初は社団法人でなしに発足し、理事長に野呂景義を推し、理事に今泉嘉一郎、俵国一、香村小録、寺野精一を決めた。従つて定款でなく会則を規定した。機関雑誌を“鉄と鋼”と命名し毎月1回発行することとし、大正4年3月創刊号を出したので、第1年は10冊をもつて終り、爾来終戦当時を除き毎月発刊している。

以下は私の心もとない記憶を辿り解説じみたようなものを書く。実は戦災で自分の記録、書類など一切を焼失したので覚え違いの点あらば用捨願いたい。

本協会の設立は、全く工学博士野呂景義先生の主唱に依つたもので、最初の相談会も先生が招集されたもの、会した者皆先生の門下生であつた。たしか日本鉄鋼業会の懇談会が浅草橋付近の料理屋であつた際と思う。そこで始めて4人が懇談したと記憶する。(日本鉄鋼業会誌の大正3年11月357号によるに、大正3年6月初め日本鉄鋼業会臨時大会が開かれ、同6月6日に懇親会を隅田川河岸に沿つた福井楼で催したとある。その席上別室で最初に会合したことを確実と思う。)会則その他すべてのこと野呂先生の意見が主に用いられた。

野呂景義先生は、愛知県出身者で明治15年東京大学理学部採鉱冶金科を卒業せられた。爾来東京大学の教授として鉄冶金学の講義をなされ、その子弟に明治25年卒業の今泉嘉一郎博士、服部漸博士および香村小録博士

などがある。私が2年生のとき講義半ばで大学教授を辞職せられた後は、釜石の田中製鉄所または官設枝光製鉄所の顧問などなされ、製鉄業殊に熔鋳炉の作業に力を尽された。大正12年末大震災後物資不自由の時分に逝去せられた。実に野呂先生は本邦製鉄業の発展に寄与せられた大先輩で、また本協会の主唱者、有力なる指導者であつて永くその徳を仰がねばならぬ。

本協会会則の特色と思うことは会員の資格である。鉄鋼製造者は勿論のこと、それに鉄鋼販売者のほか鉄鋼使用者を含めたこと、従つて最初から船舶専門家の寺野精一博士を理事にお願いし、その後も会長または理事として他専門家が尽力なされた。これは当時製鉄業者の勢いが今日程盛んでないにもよるが、主として鉄の使用者、需要家の協力なしには成り立たない理に基くと考える。これは飽くまで心してもらいたい。製鉄業のような各種専門家の総合技術を必要とするものでは是非心得ねばならぬと思考する。そんな意味を含めて学会といわず協会と唱えるようになった筈である。最初は理化学的試験所および参考品陳列所を設ける定めであり、野呂先生の強いての主張であつた。これを実施するに至らず単に小さな機械試験所を置いた位で中絶した。

自分は最初から会誌「鉄と鋼」の編集を受持つたもので、自ら校正をもしたし、また原稿の集め方に苦心し鉄道研究所や逓信省船舶局の友人に懇請したこともある。野呂先生の創刊号より連続17回に亘る長編「本邦製鉄事業の過去および将来」と題する論文を寄せられるのありがたいと思つた。会誌の表紙にある「鉄と鋼」の文字はたしか香村小録博士が某書家に頼まれたものと記憶する。会誌の体裁は当時の一般の例に準じて縦書であつたが、大正14年すなわち第11年より現在の横書となつた。その時分に種々編集事務など助けて下されたのは海軍技研の室井嘉治馬氏、陸軍の川上義弘博士ならびに大学の井上克巳博士等である。各氏共に昭和20年4月に本協会より協会事業の振興発達に対する貢献に酬ゆるため表彰状を受領せられた。

野呂大先輩のほかに今泉博士、香村博士および服部博士等は私の脳裡に永く製鉄技術者の3先覚者として敬慕した方である。今泉博士は枝光製鉄所の製鋼部長として令名あり、野に下りて日本鋼管株式会社を創立なされ、塩基性転炉法を始めて本邦にて行なわれたのは衆知の通

りである。その縁により日本鋼管株式会社寄贈資金および故今泉博士記念資金ができた。香村博士は大学卒業後釜石田中製鉄所に赴任せられ、当時唯一の製鉄所において努力経営なされた後東京に在勤、本会のため尽力なされた。また博士は私財を寄贈せられ、本会は香村博士寄贈資金取扱規則を制定した。創立当時服部博士は遠く枝光製鉄所に勤務されていたため、直接に会務に関与されなかつたが、東京転勤の上は会長の職に就かれ会のため尽力された。服部博士記念資金寄付者の申出に基き本会にその取扱規則ができた。

野田鶴雄博士は永く呉海軍工廠の製鉄部長を務め、後八幡製鉄所の技監となられ、昭和9年日本製鉄株式会社東京本社在勤、会長に就任し尽力せられた。記念事業として資金を募集し、これを本会に寄贈し、野田文庫を設立することになつた。俵博士記念資金取扱規則なるものがある。昭和7年東京大学退職に際し知人の方々が募集して下さつた一部の金員を本会に差し出し、優秀な論文に対する奨励に使われる。誠にありがたい痛み入ることである。渡辺三郎博士は日本特殊鋼株式会社の創立者、本邦特殊鋼製造発展に功労のある方である。本会長として尽力せられ、金員を寄与せられ、本会は日本特殊鋼株式会社寄贈資金取扱規則を制定している。そのほかに河村驍博士は会務に懸命に努力せられた方で、2回も会長に就かれ、その勤め先が三菱製鉄会社で近くであつたため、常に会務を指導せられた功績は大きい。また博士は私財を本会に寄贈せられ、毎十周年毎に本会記念祝賀会に使用するよう決定した取扱規則ができています。今次の終戦の際に恰も華北の製鉄業顧問として北京に滞在しておられ、引揚のため太沽に待合せ中種々の困難に遭われた結果、不幸病没せられたことは真に悲むべき極みである。現在の協会事務所も全く同博士の尽力で決つたものだ。

かく本協会創立当時の記事を読んで見ても、生存者は自分独りで聊か心細く、顧みて各先輩の努力せられた跡が身に泌み憊ばれ懐しい。それに引き続き各後継者の努力と各製鉄会社の絶大な後援および通商産業省と鉄鋼連盟との協力を得て協会が今日益々隆盛となるを祝し得る仕合を喜び、併せて将来の発展活動を冀う気持で一杯である。(名誉会員、前会長)